

春秋会

ニュースレター

2023.6



今月の予定

・6/9（金）18:00

若手会主催研修「初めての破産申し立て・初めての管財業務」

・6/21（水）12:00

幹事会

・6/30（金）18:00

政策・研修委員会主催研修「若手必見！インボイス、無視して大丈夫！？」

離婚研修

2023年5月17日、大阪弁護士会12階において、研修委員会と若手会の共催で「離婚研修」が開催されました。

講師は、高坂明奈先生（61期。女性共同法律事務所）。参加者は、会場とZoomを合わせて約50名にものぼりました。



高坂先生は、知識・経験いずれも豊富で、具体的な事例も踏まえたご説明、質問へのご回答など、とても実務的で痒いところにも手が届く、大変役立つ研修でした。

特に、今回の研修の中で、女性の依頼者には、「プロセス」を重視する方や、「共感」を求めている方が多いという点について、離婚事件だけに限らず、依頼者対応一般の話としても意識しなければならないと思いました。

2023 年度 広報委員

- ・松尾 洋輔 (59期、委員長)
- ・溝上 絢子 (57期、担当副幹事長)
- ・西原 和彦 (55期)
- ・堀川 智子 (57期)
- ・浦 寛幸 (59期)
- ・広瀬 元太郎 (60期)
- ・柳 勝久 (61期)
- ・山田 寛子 (65期)
- ・金星 姫 (66期)
- ・木場 晶子 (67期)
- ・田村 瞳 (67期)
- ・板崎 遼 (67期)
- ・吉留 慧 (68期)
- ・高一 成 (69期)
- ・根本 俊太郎 (70期)
- ・足立 敦史 (71期)
- ・村本 健司 (71期)
- ・河野 哲平 (71期)
- ・オ木 晴幹 (72期)
- ・中岡 さつき (72期)
- ・中西 教子 (72期)
- ・久井 大輝 (73期)
- ・山本 こずえ (73期)
- ・佐々木 崇人 (74期)
- ・神澤 鈴子 (74期)
- ・秦 尚輝 (74期)



私は、弁護士として問題についての結論がどうなるか、重要な事実が認定できるかという結果が一番の関心事だと思っていました。もちろん、結果が重要であることには変わりないのですが、相手方への主張の仕方、結論の伝え方を含む過程が重要視されることを学びました。

また、「共感」について、依頼者の話を聴いて、真の意味での共感 は人生経験的にできないと思います。それでも、依頼者の心情を想像して、共感を示していく、このような姿勢を大切にしていきたいと思います。もちろん、相談、打ち合わせ時間には限りがあり、事件解決のために重要なことを多く聞きたいと考えてしまいがちです。その中で、依頼者に共感をし、話をできるだけ遮らずに聴くということは想像よりも難しいと思います。高坂先生は、離婚事件に合わせた相談票を作成し、必須の聴取事項を聞く時間を削減することで、傾聴する時間を確保していらっしゃるのだと思いました。これも離婚事件に限ったことではなく、別の事件類型でも活用できると思いました。

離婚事件では、依頼者との信頼関係を形成することが難しい場合も多くあるため、離婚事件を多く扱ってきたことで、高坂先生には、依頼者との信頼関係の築き方のノウハウが修練されているのだと思いました。このようなノウハウは参考書で学ぶことができない情報ですので、このような研修は貴重な機会だと思いました。

この場をお借りして再度感謝を申し上げます。高坂先生ありがとうございました。



古典芸能よもやま話

～面白くない「能」について

中村和洋（49期）

1 全く面白くない「能」の作品とは

これまで、古典芸能は面白い！！という話をしてきましたが、「能」の中には、とてつもなく退屈で面白くない作品があります。しかし、実はそのような作品にこそ「能」特有のだいご味があり、むしろ楽しめるのだということを、今回ご紹介いたします。

それは「芭蕉（ばしょう）」です。

2 「芭蕉」のあらすじ

中国の「楚」の国の山中で僧が修行をしています。そこに1人の女が現れ、僧との間でものすごく難しい仏教の論議を長時間したあと、帰ってしまいます。夜更けになって、また女が現れると自分は「芭蕉の精」だと名乗り、草木も成仏できるのだとか何とか述べるとゆっく

りと「序の舞」を舞います。時間が経ち、ふと気が付くと庭の片隅で敗れた芭蕉だけが残っていました。

「えっ、あらすじ、これだけ？」って思われるかもしれません。そうです。本当にこれだけなのです。

3 解説と感想

登場人物は、「僧」と「芭蕉の精」の2人だけ。場面も、小道具も何もないお寺の一室だけで移動は全くなし。

それだけならまだしも、何と、この能の演目は2時間以上(!)もあります。

2時間……。それだけあれば、例えば宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」なら、海賊に襲われた女の子が空から降ってきて、それを助けた少年が少女を連れて逃げて、軍隊に捕まってから、女の子を助け出して、海賊と一緒にラピュタを探して……。 (以下省略) と、波乱万丈の大冒険活劇が展開できます。

しかし、「芭蕉」は僧と芭蕉の精がただ会話するだけ。話の中身はどうやら法華経をもとにしているようですが、ある程度仏教の基礎知識があっても難しすぎてさっぱりわかりません。およそエンターテインメントとはかけ離れた難解すぎる作品です。

作者は世阿弥の娘婿の金春禅竹。禅竹さん、何を考えてはったのか。

そもそも「芭蕉」って植物、何？

なんかバナナの葉っぱみたいなやつだそうですが、馴染みがなくてピンとき

ませんね。しかも、そんな芭蕉の精ってマニアックすぎ。

場所も中国の楚とか言われても、「四面楚歌」という言葉で名前くらいは知っていますが、そこのお寺がどんなところか想像もできません。

さて、私が能を見始めてからまだ数か月しか経っていない頃、たまたま大槻能楽堂で「芭蕉」が演じられていました。その頃は足を運べる限り能楽堂を訪れていたのも、特に何の気なしに見に行ったのです。

しかし、あまりの難しさ・退屈さに、驚愕しました。

見に行っているお客さんの多くは「能」のファン層のはずです。ただ、チケットをもらったとかで予備知識なく来ている人もいるよう

で、終わってから「長すぎる！！わからん！！」と言って、怒っている人もいました。

私も見始めて15分くらい経ってから、「これは、かなりヤバイ²かも」と気が付きました。しかし、その頃の私は「何としても俺は能を好きになる！！」と燃えに燃えていました。ですから、これぞ試金石だと思って、痩せ我慢をして見続けることにしたのです（マゾですね）。

舞台の動きは全くなく、言葉の意味も普段以上に全くわかりません。ただ、1時間を過ぎたあたりから、言葉にしにくいのですが、なんともいえない不思議な感動がじわじわと心の中に生じてきました。

あたかも最先端の前衛芸術に触れているかのような非現実感が、かつて感じたことのない感情を呼び起こしたようです。まるでジョン・ケージ³の音楽を聴いたときのような、あるいは李禹煥（リ・ウファン）⁴の作品を見たときのような。しまいには、この宇宙に「僧」と「芭蕉の精」と「私」しかいないような、とても不思議な浮遊感を感じ、完全にあちらの世界（どこ？）に意識を持っていかれました。

そして、唐突に始まる「序の舞」。これはもう、シュールレアリズムの世界。しかし、私はあんなに美しい「序の舞」をその時以来見たことはありません。

2時間以上の作品を見終えて、ふっと現実に戻りました。きっと宇宙旅行から帰還した宇宙飛行士は、こんな気持ちなのかもと思いました。

この全く面白くない「芭蕉」は、私をすっかり「能」の世界の虜にしまいました。こんな、静かで意味がわからなくて、しかし過激な舞台芸術はほかにはないと思います。

もちろん能には、「葵上」「土蜘蛛」「安宅」のように、動きもあって、ストーリーも面白い作品はたくさんあります。しかし、「芭蕉」のような抽象芸術の極みのような作品もあり、その幅の広さに驚かされます。皆さんも、是非、一見、面白くなさそうな作品の観能にも挑戦してください。新しい世界が開かれるはずです。

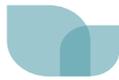
つづく

¹シテがクライマックスで披露する、と一つてもゆっくりした舞踊のこと

²本来の意味で、「危険」

³アメリカの現代音楽家。ピアノの前に座るだけで何も演奏しない「4分33秒」が有名。

⁴韓国出身で日本において活動している現代美術家。「もの派」の代表的人物で、単に岩と鉄板を置いているだけとか、筆で線を書いただけの絵とか、シンプルすぎる作品を発表。



ひと月一島国内航路全線制覇への旅(2)

～沖縄県：伊江島～

広瀬元太郎（60期）

春秋会は結構沖縄が好きである。その思想的な立ち位置（と勝手に筆

者が思っている）からも、沖縄に興味を示すのは理解できる。団体旅行で沖縄にいくと、避けて通れないのが美ら海水族館である。おそらく読者も何回も行っているであろう。私も、美ら海水族館には何回も行ったが、ここから海の方を見ると、真っ平らな平地に鍋の蓋のつまみのような山のある島が毎回見える。この島を伊江島という。まあまあ大きい。この特徴的な形状からこの島のことには気になっていた。



【国土交通省国土地理院地理院地図】



今回は、この島に渡り鍋の蓋のてっぺんに立ちたい。

沖縄の小さな離島に行くのは結構大変である。まず、船の本数が一日2～3便しかない。島に行く船の出発港が那覇から遠い。あと、どうしても

も、沖縄に行くとなると、家族が付いてくる。そうすると、普通の観光

地に行きたがり、伊江島に一日の大半を費やすという旅程の理解が得にくい。

さて、コロナも終わりに近い4月16日、沖縄の本部（もとぶ）港にやってきた。美ら海水族館の南10キロくらいの場所である。今回は、北谷村（本当の真ん中より少し南）に泊っているのでここまで一時間半はかかる。色褪せた看板や猫など、港特有の独特の雰囲気が漂っており好ましい。本部港は伊江島行きフェリー以外にも、那覇と鹿児島を結ぶフェリーも寄港する。切符売り場には、奄美大島とか鹿児島行きの運賃も掲出されており、これは近いうちに必ず乗らなければいけない。

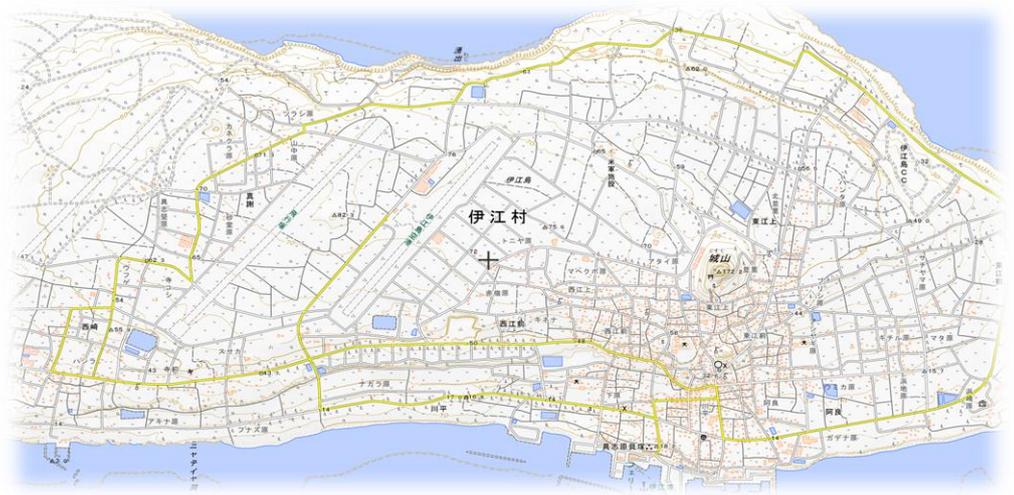
伊江島行きの船は一日4便。航海時間は30分である。一般に離島航路は、島民のためにあるので、ダイヤを島民の動きに合わせており、外来の客には使いにくい。今回は、鍋のつまみに登って降りる時間も見ないといけないので、2時間程度は滞在しないといけない。一番効率のよさそうなのは、11時発の便で11時30分着、13時発の便で戻ってくるというスケジュールと考えられる。13時発の便を逃すと次は16時の便である。



片道30分の航海なので、小ぶりな船と予想していたが、伊江島行きフェリーは思いのほか大きい。定員は700人で、売店もある。前回の家島から坊勢

島への船が航海時間15分で10人乗りくらいだったのと比べると相当アンバランスである。

定刻11時に出航する。今日は少し黄砂が飛んでいて見通しが悪いものの快晴である。美ら海水族館が見えてきた。海上から見るのは初めてである。ヒルトングループのリゾートホテルも見える。すでに雰囲気は夏であり、海は陸の近くはエメラルドグリーンに輝き、沖合は紺碧。パラセーリング中のパラシュートも浮かんでいる。沖縄はいい。



【国土交通省国土地理院地理院地図】

船は大きいものの距離は短いので30分で伊江港に着いてしまう。鍋のつまみがずいぶん大きく見える。この船は1時間30分港に停泊し、本部港に戻るので、その間に鍋のつまみに行かなければならない。つまみは、「タッチュー」という名称で標高172メートル。タッチューとは、島言葉で先端のとんがっている物という意味である。タッチューの登山口まで、グーグル先生によると2.8キロだ。

冷静に考えると、2.8キロは、「不動産の表示に関する公正競争規約」規定の分速80mで計算すると、片道35分。35分歩いてやっと登山口なのだから、登山時間往復40分だとして、 $35 + 40 + 35 = 110$ 、1時間50分で間に合わない。港からはタクシーに乗れば間に合うのだが、事前調査によれば、島にタクシーは極めて少ないとのこと。タクシーがいるかも不明である。着岸直前、船から見る限りでは、栈橋に1台タクシーが停まっているのが確認できるが、予約車である可能性も高く、厳しいな。まあ、乗れなきゃ次の船に乗ればいいだけなのだが。

結構観光客も多く、タクシーは危惧されたが、みんな徒歩で港から去っていき、このタクシーに乗れた。登山口までは7,8分で着いた。その間に運転手は、もうすぐ「ゆり祭り」があること、島の方言は沖縄本島と微妙に違うこと、高校に上がった島を出て本土（沖縄本島のこと）に下宿しなければならず、自分はホームシックになったことなどを次々と語ってくれた。ここから見ると、沖縄本島が本土なのか。ハイビスカスが咲き誇るけだるい午後、だれもいない道をタクシーは走る。沖縄はいい。



タッチューの登山口に着く。う、岩の塊じゃないか。ここ登れるのか？
ここから先は、非常階段のように狭く急で、一段が30センチくらいある階段が岩を巻いている。極めてしんどいが15分くらいで岩の山頂に立つことができる。伊江島の地形はまさに鍋の蓋で、タッチュー以外はすべて平地であるから、タッチューの頂上に立てば、島の全てを見ることができる。ここに大砲を据え付ければ、全島民を掌握できる気がする。同じようなことを考える権力者はいたようで、タッチューの別名は城山（ぐすくやま）である。ただ、そういうことをしても補給路を断たれるとかなり脆弱な場所なので、武力だけでの制圧は不可能と考える。なお、1945年、この島はアメリカ軍に武力だけで制圧され、島民に大量の犠牲者が出たことは忘れてはならない。

頂上は狭いが先客がいる。ガイドさんと一人旅の若者という謎のペアである。ガイドさんは、「ここは富士山よりは低い、360度海が見えるのはここだけです」というような説明をしている。くだらない突っ込みをして申し訳ないが、360度海が見える場所（小さな島の山頂）は、瀬戸内海にはかなりある。ただ、海の色は瀬戸内海とは違う。北の方角には、沖縄北端の島伊是名島、伊平屋島が見える。ここもまだ行ってないので、行かなければならない。

個人的な感想として、旅において一番気分が盛り上がるのは、ある場所まで到達した際に、そこから先の未知の地が見えるという状況である。おそらく、人類はこれを繰り返して、アフリカを出て、南米大



陸南端までたどりついたので。

タクシーで7, 8分。タッチュー往復で40分かかったが、帰りは、歩いて港に戻った。急な階段の近道を見つけたので、余裕をもって帰りの船に間に合った。帰りの船には、多くのアメリカ軍人が乗船していた。伊江島は小さな島だが、現在も米軍基地がある（上の写真の奥の方）。

親睦委員会

～謎解きゲームイベント～

鈴木伸太郎（74期）

令和5年5月29日、西天満において謎解きゲームイベントが開催されました。当日は、たくさんの先生方のご参加により、大変盛況な会となりましたことをご報告させていただきます。

今回用意されました謎解き用の事件ファイルは、数多くの脱出ゲームや謎解きゲームを手掛ける株式会社SCRAPと、推理小説家で直木賞作家でもある道夫秀介氏の共同開発により生み出された商品を使用しており、非常に本格的な謎解きと面白いストーリーを楽しむことができました。



イベントの内容は、まず3～4人ずつのグループに分かれ、知恵を出し合い用意された事件ファイルの謎を次々に解いていくというものです。最終的に全ての謎を解き明かした時間が最も早かったグループが優勝となるチーム対抗戦の形式で行われました。参加された先生方は、ビールを片手に、食い入るようにして資料を読み込み、チームで話し合いながら謎を解いていきますが、何しろ皆ほろ酔い状態の捜査チームでありますので、斬新な発想や迷？推理があちらこちらで飛び交い、各チーム大変な盛り上がりを見せていました。



まず、スマートに謎を解いていくAチーム。序盤から怒涛の勢いで他チームに差をつけて謎を解いていき、難解な謎も迅速かつ正確に解き明かしていきました。



チームプレイが光ったBチーム。序盤こそは出遅れましたが、随所で、各メンバーのファインプレイが連発し、ラストは見事優勝を勝ち取りました。



謎解きを最も楽しんだCチーム。各謎をじっくりと検討し、最後まで、事件ファイルをあますことなく楽しみました。



実は優勝？だったDチーム。神がかり的な直感力により、なんとゲーム開始15分で、最後の謎の答えを言い当てていました。答えに行きつくまでの謎解きもできていれば、パーフェクトでした。

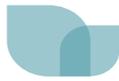


また、同イベントは、西天満のチルコロさんにて、開催させていただきました。広い会場にて、数々の美味しいお料理とお酒に舌鼓を打ちながら、ゆったりと謎解きを楽しむことができました。チルコロさんには心か

らの感謝を申し上げます。

謎解きイベントは、当会の企画としては初めての試みでしたが、想像以上の盛り上がりで、皆様とても楽しい時間を過ごしていただけたのではないかと実感しております。また、第2回も開催できればと考えておりますので、皆様、是非とも奮ってご参加下さい！また、この後もたくさんの楽しい企画を盛りだくさん準備しておりますので、そちらの方にも是非ともご参加いただけますと嬉しいです！

親睦委員会一同、今後も精一杯楽しい企画を作ってまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。



1 「筆頭」の仕事

執行部は、岩本幹事長のもと、6名の副幹事長、1名の嘱託弁護士で構成されています。

副幹事長は、それぞれ政策、広報、研修、親睦、会計、若手会を担当し、もっとも期が上の副幹事長が「筆頭」となるのが慣例です。今年度の執行部には、過去にも執行部経験がある方、嘱託経験がある方など経験豊富で優秀な方がおられるのに、そんな理由から執行部初体験の私が「筆頭」となっています…。

大弁では各会派の「筆頭」副幹事長が恒例で副委員長を務めることになっている委員会が複数あります（修習、財務、公益活動推進）。筆頭は常議員にもなるので1カ月に2回の常議員会への出席、さらに近弁連や日弁連交通事故相談センター大阪支部の理事も会派の筆頭になるのが慣例のようです。

このように筆頭は会派内だけでなく、会派外の種々な仕事を受け持つことになります。中には、就任承諾した覚えはまったくないのに就任したことになるものもあるような気がします。忘れていいのかもかもしれませんが…。

2 修習委員会の副委員長

たまたまこの2年ほど、一修習委員として交互尋問や模擬法律相談の指導はスポットでしたことがありましたが、いきなり副委員長となりました。

大阪の弁護修習は4班体制で、2カ月毎に新たなクールが開講して閉講して、そして次のクールが開講して閉講して…ということが繰り返されていきます。個別修習は修習先事務所ですが、合同修習として、各クールごとに開講式と閉講式、模擬法律相談に即日起案（立会と30人分の起案添削）、弁護士倫理講義（つまり年4回、同じことの繰り返し）、そして選択型実務修習の実施や交互尋問の指導、さらに個別問題の対応に成績判定評価などとけっこう時間もとられて大変な仕事です。

開講式と閉講式は懇親会もあります。私は、事前に弁護士会事務局に「別に副委員長は複数おられるから、一人くらい行かなくてもいいですよ」と電話で確認したのですが、「ハイ、ただ、副委員長は欠席でも〇〇円の会費はお支払いただくことになっていますので、時間が合えば

ぜひご出席下さい」と言われました。何も食べずに会費のみ払うのもどうかと思って、今のところ全会出席するようにしています。

2時間の間に、各班約30人の修習生全員がひと言ずつスピーチしていくのですが（実はこれを聞くのもなかなか大変…）、20数年前の自分を見ているようで「初心忘るるべからず」の新鮮な気持ちを思い起こさせてくれます。

3 財務委員会の副委員長

財務委員会は、大阪弁護士会の会計や財政を司る委員会で、毎月、一般会計と特別会計の月次決算の報告や承認をしています。様々な費目や数字を見せられて説明されても、正直言って、1~2回出席した程度では内容はさっぱりわかりません。

昨年度の福田健次会長の際は若手会員の一般会費を半額とする期間延長問題の諮問で議論もあったようですが、今年はさしたる議論もなく、徐々に勉強しながらやっていこうかと思っています。

4 公益活動推進委員会の副委員長

恥ずかしながら、筆頭になるまでこんな委員会があること自体知りませんでした。

当会の会員には公益活動に従事する義務があるので、その義務の周知徹底を行い、高齢・疾病・出産・介護などの事情があって公益活動義務を果たせない方の公益活動負担金免除申請についての審査、未履行者に対する勧告をしています。

法律相談、国選、刑事当番、委員会への参加などが公益活動ですが、最近は委員会もウェブで実施されることが多いと存じます。育児や体調などの問題もあるでしょうが、できる限り委員会にウェブ参加していただければと存じます。

5 最後に

もちろん会派内の政策委員会や選考委員会の仕事、正副幹事長会や幹事会への出席もあります。

今年度執行部の顔合わせでは、「申し訳ないですが、私は執行部初めてなので、今年は全員が『筆頭』の気持ちでお願いします！」と言って、快諾をしていただきました（たぶんですが…）。今のところ、副幹

事長のみなさんが、気持ちの上では全員筆頭、全員野球でやって下さっているようですので、なんとかやっていけています。

今年のタイガースが好調なのは、下位打線で出塁して、一番近本、二番中野で得点するパターンが多いからだと思います。岩本執行部も、ぜひともこの調子の「全員野球、全員が筆頭」の気持ちで、一年間、岩本幹事長を支えて乗りきりたいと思います。



ニュースレターの原稿大募集します

広報委員会といたしましては、このニュースレターを双方向的なものにしたいと思っており、皆様の原稿を大募集します。ぜひ、投稿ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

下記にお送りいただければ、ニュースレターに掲載させていただきます（もちろん、一定の審査はさせていただきますが…）

広報委員会委員長 松尾洋輔 y-matsuo@dojima.gr.jp